

説教題：「**神の豊かな恵み**」

聖書箇所：エフェソの信徒への手紙1章1-14節（352頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讚美歌93 - 1 - 42 交読詩編：詩編113編1 - 9節（126頁）

讚美歌：83/149（わがたまたえよ）/334（よみがえりの日に）/78（わが主、ここに集い）/27

「今週の聖句」 〔わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。〕（エペソ書1：7）

「牧師室の窓」 「バチカンの教皇天に召されたる平和を説きしフランシスコ・パパ」

「甘夏の白き花咲く五月晴れ甘き香りに暫(しば)し佇(たたず)む」

(1)皆様おはようございます。2025年の5月、爽やかな季節になりました。新緑の若葉が美しく輝いています。小竹向原駅からこの教会までの道の両側に植えてある木々を見ながら歩くのは楽しい季節です。

一昨年(2023)の8月から先月(2024)4月までの1年8か月に亘(わた)ってルカによる福音書の大部分を講解説教として、礼拝で読んで参りました。これからも折に触れて読んで参りますが、今月からは新約聖書の使徒書であるエフェソの信徒への手紙を読んで参ります。エフェソの信徒への手紙、略してエフェソ書、或いは、エペソ書と呼んで参りますのでご諒解ください。エペソ書は全部で6章あり、聖書のページ数では9ページと多くはありませんので、数カ月の期間で読むことが出来ると思います。併(しか)し乍(ながら)、当時の時代背景を思いつつ読んで参りたいと思います。当然ながら、現代に生きる私たちとは全く異なる社会制度や状況の中に生き、信仰に生きていた先達(せんた)に思いを馳せて参りましょう。先達の困難を分かち合い、信仰の希望の灯(ともし)火を受け継いで参りたいと思います。この礼拝の僅かな時間ですが、時空を超えて、当時の場面に入り込み、身を置いてみましょう。多くのことを理解し、体験することが出来るものと思います。

(2)本日の聖書箇所は次の様に始まります。1節です。〔(1:1)神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロから、エフェソにいる聖なる者たち、キリスト・イエスを信ずる人たちへ。〕この手紙の書き手はパウロで、宛て先はエフェソにいるクリスチャンたちへとなっています。この手紙が書かれたのは、研究によれば、西暦80年～90年頃と推定され、一方、パウロは西暦67年頃にローマ帝国当局による迫害で殉教しています。従って、パウロが書いた手紙ではなく、パウロの名前による手紙と推定されます。パウロの名前によるとは、パウロの考え方が当時の初代教会を信仰集団にとって重要な考え方であると理解されていたのです。初代教会の指導者たちは信仰に関する重要な手紙を出す時にはパウロの名前を使用していたと考えられます。話しを元に戻しますと、私たちが現在手にしている様な新約聖書が出来上がっているのではなく、遠く離れた場所の夫々の教会では信仰に対する考え方に違いが生じているのです。加えて、ローマ帝国内でのローマ皇帝崇拜、ローマ神話や各地域での多神教や、ギリシャ哲学などなどにより、加えて、ユダヤ教の律法を重視する考え方からの圧力によって、初代教会の信仰は地域ごとに異なる要因により変質してしまう危機に曝(さら)されていたのです。従って、信仰の基本を示してきたパウロの名前による手紙を出して、夫々の教会で回覧し読んでもらい、実践してもらうことが重要でした。

(3)次に、この手紙の舞台となったエフェソについて理解を深めましょう。エフェソの場所はアジア州、現在のトルコ共和国の西側エーゲ海に面した港町でした。エーゲ海と言うのは地中海の中でもギリシャとトルコの間(ま)に挟まれた海です。エフェソはギリシャの東へ約300km離れて位置しています。緯度は北緯38度にあり、日本の東北地方の仙台とほぼ同じです。新約聖書の使徒言行録18章～20章に、パウロが訪れていたことが書かれています。ギリシャのコリントで出会ったユダ

ヤ人アキラとプリスキラの夫婦と共に船に乗ってエフェソに行きました。暫(しばらく)く滞在し、アキラ・プリスキラ夫妻をエフェソに残し、エルサレムに戻りました。パウロもアキラ夫妻も同じ職業・テント造り職人として生計を立てていました。パウロの第2次伝道旅行の帰り道での出来事です。

パウロはエルサレム教会での挨拶を済ませると直ちに第3次伝道旅行に出発し、今度は陸路によってエフェソに到着しました。エフェソの町は港町であり、商業の町として栄えていました。この街のシンボルとしてアルテミス女神(めがみ)神殿があり、当時のアジア州全域の人々の信仰を集めていました。パウロはこのエフェソの町に2年数ヵ月滞在し、イエス・キリストの名による悔い改めの洗礼と信仰を宣べ伝えたのです。パウロの働きは使徒言行録19章10節には「〔(19:10)このようなことが二年も続いたので、アジア州に住む者は、ユダヤ人であれギリシア人であれ、だれもが主の言葉を聞くことになった。〕」19章20節にも「〔(19:20)このようにして、主の言葉はますます勢いよく広まり、力を増していった。〕」と書かれています。パウロ、そして共に働いた教会員との信仰のチームプレーが聖霊の働きに導かれたことが記されています。アルテミス女神信仰では満たされない民衆の人々に恵みが与えられていったのだと思われまます。

(4)きょうのエペソ書の宛て先は1節の後半にあるように「〔(1:1)…エフェソにいる聖なる者たち、キリスト・イエスを信ずる人たちへ〕」と書かれています。「聖なる者たち」とは、神と共に生きる人、神に属する人と言う意味です。それが即ち「キリスト・イエスを信ずる人たち」です。イエス・キリストを今まで知ることがなかったエフェソの人々に「恵みと平和」が与えられたのです。今日の聖書箇所は僅か14節ですが、「キリスト」または「御子」と言う言葉を数えますと、なんと、15回も記されています。なぜこんなにも多く書かれているのでしょうか。単に強調しているだけではありません。エフェソでの信仰の困難を乗り越えてきたことを表わしていると推察されます。まずは2節を見てみましょう。「〔(1:2)わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。〕」「恵み」とは、ギリシア語でカリスと言いまして、愛らしさ・恩恵・賜物・感謝と言う意味です。英語ではグレイス(grace)と翻訳されています。また、「平和」とは、ギリシア語でエイレーネと言いまして、平和・平安と言う意味の他に、ヘブル語のシャロームを元にして、安否を問う挨拶言葉やお元気で・ごきげんようと言う意味です。英語ではピース(peace)と翻訳されています。「恵みと平和」は2千年前の人々にも、2千年後の私たちにも通じる言葉であり、人間の生活・生存には無くてならぬものであることをはっきりと・しみじみと理解することが出来ます。慌ただしい人生を送ってきた人々、アルテミス女神信仰では満たされない人々にとって、この2節の「〔(1:2)わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。〕」と言う呼び掛けが心に沁(し)みる安堵感を与えたであろうと推測することが出来ますでしょう。

「恵みと平和」とは福音のシンボルであり、中心・核心、つまり、1丁目1番地です。教会は礼拝により、神の御言葉を聴く、祈りを捧げる1丁目1番地であります。この世の人々に対しては、福音を宣べ伝える発信地であります。併し、「福音を宣べ伝える」と言う言葉は世間の人々には分かりにくい、理解されるとは言い難いです。従って、「キリストの恵みと平和を伝える」と言い換えては如何でしょうか。コロナ感染がほぼ終了したこの数年間に、日本も世界の状況も、政治も経済も社会も大きく変化しています。何よりも変化したのが技術革新です。日本基督教団も東京教区も、社会が激変していることを認識し、時代の変化を把握しなくてはなりません。私たちは、その変化の中にあっても永遠に変わらない神の御言葉を伝えて行く役割・使命があるのです。

(5) 4節に進みましょう。〔(1:4)天地創造の前に、神はわたしたちを愛して御自分の前で聖なる者、汚れない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。〕ここには矛盾がありません。

何故ならば、人間は天地創造の前・以前には存在しないと考えられるからです。その様なことは矛盾でもでたらめでもなく、神が私たち人間とどの様な存在であるのかを伝えようとしておられるのです。5節には、4節を別な言葉で言い表しています。別の言葉で表現すると言うことは重要です。何故ならば、心に沁(し)み通るからです。6節には、私たち人間が神の愛にどの様に応えるのか、接するのかが書かれています。それは「神を讃(たた)える」ことに尽きます。7節8節にある「神の豊かな恵み」はキリストの十字架によって実現することを述べています。使徒言行録19章でのパウロたちが伝道の困難を乗り越えてきたことを示しています。8節に書かれている「知恵と理解」とは、自分の能力によって得られるものではなく、「神の恵み」「神の御心」によって得られるのです。9節には「秘められた計画」と書かれています。私たちの人生は生まれてから天の国に行くまでどの様な道を進んでいくのでしょうか。私たちはいま人生のどの様な道にいるのでしょうか。先般のNHKラジオの番組では、学校に行かずに悩んでいる中学生・高校生が多いと報道していました。子供たちばかりではありません。どの年代・年齢であっても悩みは尽きないでしょう。併し、私たちに与えられた神による「秘められた計画」を求めて神との会話、つまり、祈りの通信・交信を行なうことにより、私たちの人生は神によって守られていることを知ることが出来るでしょう。そのことが9節の後半に〔前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです〕と書かれているのです。11節～14節には、神による「約束」「相続者」「証印」「保証」と書かれています。私は信徒時代にこれらの言葉が満ちている仕事をしていましたので、「約束」の重要性や「保証」の法的な実態をつぶさに見てきました。聖書の御言葉が人生の道を照らす光であり、主と共に歩む道しるべであると確信しています。「神の豊かな恵み」を与えられて、「神の栄光をたたえる」人生を歩んで参りましょう。

・・・お祈りします。イエス・キリストの主なる神様。私たちは、主の十字架の出来事を経て、主の復活・イースターを迎えたのちの日々を送っています。ありがとうございます。神の恵みに感謝します。これからも信仰を導いて下さいますようお願いいたします。

神が創造されましたこの地球上に生きる一人ひとりに平安と希望が与えられますように。食べ物が乏しい人々に、災害や戦争の只中にある一人ひとりに慰めがありますように、お守りください。私たちに知恵と勇気をお与え下さい。

教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している、働いている一人ひとりに、主なる神の御恵みと平安がありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。 **アーメン**